

2年生 「ことばのたからばこ」

活動から生まれた「話型」を 活用して表現力を豊かに

1 子どもの「発見」を活用していく

生活科は具体的な活動や体験を通して、子どもが学びを重ねていく教科です。教師が教えた知識ではなく、子ども自身が学習を通して気付いたことや学んだことを表現し、友だちと共有していくことで学びを広げたり、深めたりしていきます。活動から生まれた気付きや発見を友だちに広げ、活用することで「発見」をした子どもは自己有用感が生まれ、集団の学びの質が高まっていきます。

そこで、今回は生活科の話し合いから子どもたちが作り出した、「ことばのたからばこ」を紹介します。

2 「発見」をもとに表現力を育てる

体験的な活動をめぐる話し合いが深まるためには、体験自体が子どもにとって価値あるものであることが何よりも重要です。しかし、体験が豊かでも、自分の思いや願い、考えや工夫をことばで上手に表現できないために、友だちへ広がらないことがあります。

たとえば、「町の公園に探検に行っているいろいろなものを発見しました。」という発言には、「たとえば、どんなものを発見したのですか。」と質問が出てきます。このとき、『たとえば』が「細かく教えるためのことば」であることを知らせ、カードに書いて「ことばのたからばこ」にしまっていきます。

「どうしてカブトムシは脱皮するんですか。」など、疑問や解決できない問題が出てきたときに話し合いが止まってしまうことがあります。『たぶん』でいいよ。」と助け船を出すと、「たぶん体が硬いからだと思うよ。」などと推測した発言が生まれてきます。そこで、『たぶん』が「正解にとらわれずに考えたことを話し出すきっかけを作る」という役割をもつことを知らせ、「ことばのたからばこ」に入れていきます。

こうして、たまった「たからばこ」のことばを教室に掲示しておき、話し合いの折々に活用させていくと、一人ひとりの思考が深まり、話し合いも深まります。

その他の例をあげると、

❁「〇〇とくらべると」

「夏休みのころとくらべると、秋らしいバッグを持っている人が多くなりました。」

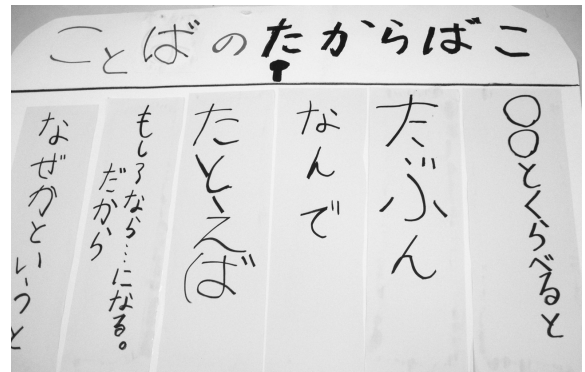
❁「なぜかというと」

「どうしてそんなに車が速く走るのですか。」の質問に対して、「なぜかというと、車の重さを軽くしたからです。」

❁「もし~なら、…になる。だから」

「もしトウモロコシをこれからまいたら、トウモロコシが夏休みにできて、ぼくたちは食べられません。だから、トウモロコシよりもポップコーンの種をまいた方がいいと思います。」

などがあります。



3 活用を促しながら成長を待つ

「ことばのたからばこ」に入ったことばは、初めは教師が示しながら活用を促します。慣れてくると、子ども同士で「たとえば？」などと質問しながら使うようになります。これらの話型は、教師が与えてもなかなかなじみません。友だちの口から出たことばだからこそ親しみがわき、流行語のように楽しみながら使うようです。学級に合わせて、いろいろな「たからもの」を子どもたちと発見してみてください。

